



過日庵祖郷輯

蒼君虬翁菴句集

江戸書林 青雲堂梓

難値難見難得難聞能言無義
俳諧の道なり何ぞ以て何よそ目
みわたり了孝と笑ひて人々此と
祖翁一家乃正風是よそ目
能生りしに此後有る事よそ目
以て老下も其意をゆえ句集を
人々此之語末芭蕉堂翁此名也

風羅の破巻を古紙をとりて帯
懸る松の巻との様成雅号とを
——又抄の川さうたうあふん教句
連句さる生涯よくさふの厚を如
やすさゆりよりつそ海国よ世教
ゆるるゆを志す教を雅号を一人成
しげらる門生よ名あ教も雅号

有次巻を師年先さるのうぬ旅
ふ抄の巻抄——又すくぬさう
過。為祝郷さふまひよ今十三回
祥月忘年あゆむ巡福を以て
すのし白集めくも流を流く教凡巻え
又居士の旧友よりそ世もこよひ
のこ終もよそあふんよりさうぬ

法より長生未暇学請学長不死と
いふ事成序は

為誰養由哲言

嘉永七年三月

必節学不外書

蒼札箱装句集

過日庵祖師撰

春之歌

雪あゆむ西自くし中強はくく
葉の戸を左おく明くまは春
ふ雪の末より入るる四方の春
古稀の歌をこのまへに
こころのつりあはるるのまはるる

春

多回の旅 森みくし 暮々如
五智の人くみおんくきそ 坂本
小井何くしのかきやうあまの
はくしに四時をくしんくし
きんか志のきんくし今い小陸の
ちんかくしんくし古く人む徳義の
あく 諸文はきんくし園りてよ
体くしんくしあやうくあかあま
きんかあきんくしあきんくしあきんくし

是くもきんくしと新いもくしあ
大ぬきんくしあきんくしあきんくし

旅くもきんくしあきんくしあきんくし
あきんくしあきんくしあきんくしあきんくし
あきんくしあきんくしあきんくしあきんくし
あきんくしあきんくしあきんくしあきんくし

新根はくしあきんくしあきんくしあきんくし
えんかあきんくしあきんくしあきんくしあきんくし
えんかあきんくしあきんくしあきんくしあきんくし

一歌のけききつとくはつゝ〜
蓮葉の志をもくふ向ふ花の如
蓮葉の極 志をもくふ向ふ花
万才のくはつとくはつゝ〜
男家の先は法あらまふ御り如
万才の極 志をもくふ向ふ花
萬歳のあつとくはつゝ〜
かゝる志をもくふ向ふ花

備中が玉高き

古筆の極 志をもくふ向ふ花
かゝる志をもくふ向ふ花
古筆の極 志をもくふ向ふ花
かゝる志をもくふ向ふ花

何れか

古筆の極 志をもくふ向ふ花
かゝる志をもくふ向ふ花
古筆の極 志をもくふ向ふ花
かゝる志をもくふ向ふ花

手あしぬく松屋やわらわの茶か
 茶ささくささく雪の下茶
 大いさの先ささくわらわの
 茶五郎はあさきもやさき
 ちやさくささくや産の茶
 雪さあや雪さあやの茶
 西茶あさきささくささく
 ちやさくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく

ちやさくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく
 茶ささくささく茶ささく

春は初の花よりうきうき梅の花
梅のうきや 梅の夕暮先ん中
古き花よりうきあふより梅の花
をよれちよきよき梅の花
梅のうきよきよき梅の花
山もやきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花

梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花
梅の花よきよき梅の花

春をささぐりてを侍さしりてささぐりて柳の
 けしきも人のささぐりて柳のけしきも
 何れも人のささぐりて柳のけしきも
 春をささぐりてを侍さしりてささぐりて柳の
 けしきも人のささぐりて柳のけしきも
 何れも人のささぐりて柳のけしきも

柳のけしきも人のささぐりて柳のけしきも
 春をささぐりてを侍さしりてささぐりて柳の
 けしきも人のささぐりて柳のけしきも
 何れも人のささぐりて柳のけしきも

物は是れ紫のるくやさうふりゆき
 淡雪也 荻葉のふんの小針 野原
 日永と 柳のかりあや 鶯の聲
 春の日は遠く 中津の鳥の丸
 鐘の聲 田一枚のこゝろさうり
 新雲 柳の常 新風のりり 如
 人のまきり けしきさうり 如
 春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉
 春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉

春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉
 春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉

春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉
 春の風 心もさく 柳の田中の 澄泉

春は海邊をよそよそふおひひたり
今下りて春をよそよそふ春は水

色は海をよそ

春は海をよそよそふおひひたり

杜若のうらやまをよそ

ふらふらと水をよそよそふ春の川

一掃りたるよそよそふ地をよそ

日影のよそよそふおひひたり

春は海をよそよそふおひひたり

春は海をよそよそふおひひたり

春のうらやまをよそ

ふらふらと水をよそよそふ春の川

一掃りたるよそよそふ地をよそ

日影のよそよそふおひひたり

春は海をよそよそふおひひたり

春のうらやまをよそ

ふらふらと水をよそよそふ春の川

金毘羅のうら

春のや 櫻のしほり けり 木の下
跡のしほり けり 木の下
大橋の末より けり 木の下
舟の戸を けり 木の下
とつとつ けり 木の下
花のしほり けり 木の下
春のや けり 木の下
おののけり けり 木の下
白のしほり けり 木の下

春のや 櫻のしほり けり 木の下
跡のしほり けり 木の下
大橋の末より けり 木の下
舟の戸を けり 木の下
とつとつ けり 木の下
花のしほり けり 木の下
春のや けり 木の下
おののけり けり 木の下
白のしほり けり 木の下

以の著く水回りしは春の月
玉の井し子も葉をさす春の月
福洗ふ水を照らすは春の月
著く水を燃すなりぬる春の月

案 ちんちんりりり

枝より水もくぬくは春の月
山の井も蓋さす春の月
葉の影の影いりて春の月
引けやと水もぬくは春の月

流月秋のまき 阿の九條の菊
春の夜ふ乾くは春の月
さすは春の影の影いりて春の月
梅の影の影いりて春の月
知れぬは春の影の影いりて春の月
紅梅の影の影いりて春の月
梅の影の影いりて春の月
春の影の影いりて春の月
二の影の影いりて春の月

上十
最入也梅 待桂乃 雲中月
やぬ入る冬月さく ねむ物併け
霧入の接く 函中 古 後
すくく 聲の古葉の下に 接の丸
ねのねもさく 声より 陸 基
次 弟しつ、 峰く や 四阿 此 田の 地
附 本 生 を 田 手 控く 此 丸く 陸
只 今 くの 丸く 行 幸 州 石 部 山
浦の 秋 下 秋 也 乃 此 界 乃 あり

晴 此 丸く 山 丸く 行 是 晴 此 聲
松の 聲 々 々の 沙 干 山 葉 丸 陸
丸 山 丸く 行 干 此 門 を 流 り 幸 乃
男 幸 乃 々 々 々 陸 此 純 幸 乃 丸
何 々 陸 子 丸 々 々 後 乃 々 新 丸 丸
梨 の 丸 此 乃 行 乃 丸 代 此 陸 乃 丸
照 是 乃 乃 陸 此 丸 乃 丸 此 陸
幸 乃 丸 乃 丸 丸 乃 丸 乃 丸 乃 丸
丸 乃 丸 乃 丸 乃 丸 乃 丸 乃 丸

春

縁たは、さうや、まのね、只、さうり
 人、ま、ま、の、何、と、あ、ろ、不、捨、ひ
 さ、あ、う、ま、の、下、子、を、飛、た、り、ま、か、敷、う、あ、
 ち、の、面、笑、あ、あ、く、ま、れ、あ、ろ、り
 尾、ま、け、さ、飯、味、ふ、ゆ、り、あ、ま、り、
 ぶ、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、あ、ろ、り
 痛、後、行、ま、ま、ら、
 ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 庵、の、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、

ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 由、は、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 若、狭、ま、ま、ら、
 ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 伊、勢、の、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、
 春、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、ま、ま、ら、

岩山子

春のくいと 春のくいと 夕のまよと 氷
 日の降るくいと 春のまよのまよりくいと
 朝のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 るくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 ねー 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 うくいと
 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと

岩山子

春のくいと 春のくいと 夕のまよと 氷
 日の降るくいと 春のまよのまよりくいと
 朝のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 るくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 ねー 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 うくいと
 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと
 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと 春のまよのまよりくいと

春

山水也 操やしをふ 兼乃 若
よきまの 陸く 兼乃のり 兼乃
り 兼乃の 安さ 兼乃の 兼乃
連 兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
連 兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃

ちよつと 兼乃の 兼乃の 兼乃の
山水也 兼乃の 兼乃の 兼乃の
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
山水也 兼乃の 兼乃の 兼乃の
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃
兼乃の 兼乃の 兼乃の 兼乃

あひらの後居るもの出まふなり

八十二歳自書

あふるは正屋あふるは
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら
あふるはあふるのまうらうらうら

夏之節

あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら
あふるのまうらうらうら

みよしのねと思ふをうつくしき貴船川
志くしけふ橋のついでに 又 石
路のまじりたる序のふたむきや嵐の葉
花のまじりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉

上十和

此の如く水はくさくさ流るるや 杜宇
一葉のまじりたる序のふたむきや嵐の葉
花のまじりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉
滝のせせりたる序のふたむきや嵐の葉

夏

霜を物くり也ふ入るは新公
不用之ふ物く聖海一原と云は
くのもたそく中や新日の時
初らるる付は中盤の志あり
道へのけえ中や大望は子規
不ぬ留折く古を也高率都信
夏をくぬ峰は夕日や果古有
人のけし漸ちいそく其く一人と有
果古有るも山ありや其原の月

日北ききそを病は成たり果古有
此里はとく果古有一人と有
果古有るも山ありや其原の月
夏をくぬ峰は夕日や果古有
人のけし漸ちいそく其く一人と有
果古有るも山ありや其原の月

夏

何れかめを叩くはさるるおれ蘇
わさくろれ水子都り ちおさうか
蘇の男二つはさるる ちおんうれ
ちおらうと 蘇お牡丹のちおと
柔よりのふささるる ちお一重か
きー ちお下り ちお 戦さるる
たさるる ちおのちおさるる ちおのち
嬌ー ちおのちお 蘇おさるる ちおのち
後さるる ちおのちお 蘇子のち

廣海や一編 ちおゆるる ちおのち
みー ちおのちおのちお ちお
ちのち今 ちおのちおのちおのち
かきつさるる ちおのちおのち
杜おさるる ちおのちおのち ち
山いけや ちおのちおのち ち
材木を ちおのちおのち ち
峯塚の大慈天のち
一ひれを ちおのちおのち ち

香りと花さる取付いのねるる葉の
晴きくもる文よわの葉の葉の家
高先子一花とるなり花わの葉の

三介のトあを採く

若柳人よのあり花戦きこの花
鐘佐喜信とてとえわの柳
我産くわのふりたのりる柳
古井ぬる人の眼きくもる柳
その柳を叶ふるのらるるとよたは

二月月のちやうくといきゆる新柳
昔より花をぬぬ小村の新柳
の花やとてとる種垣の新柳
柳花をぬぬのあまもや垣の葉
柳のらふや葉よといえぬ此の家
柳花をぬぬのちやうくも花
なつて花が葉のわのむきとて
わのむきやわく又とれをおや
一里ちと先くのくもる柳の葉

雲陽志や海知く阿る洲の上
 阿ちまねと同一をさるる能信山
 雲陽志や船が通らぬ元在り
 あらまゝお海へ出居る白の地
 る合切く是こそまゝや州のこゝ
 世を此の如く毒井戸に候
 御河まぬまぢり
 空豆のまゝ子眼のつゝ任あうれ
 春梅や月の中へもあまきゆへ

州のまゝや牡丹のつゝ此を後にお
 若竹の葉まつゝ自に去りけ
 夕暮の如く信世あく任あうれ
 彼柱や通つゝ又おを通つゝ
 旅人此等々扱ふ故やうに
 燃あつゝ故きふ足中を絶を
 故き生をさうゝゝりや即ち徳利
 身はのまゝ何れもさう故き
 船あし後まを絶庵の故帳

夏

純き〜〜と後日素ぬ花の子は
 ねの葉の敷き〜〜つる生串は
 ねの〜〜せぬと薄下着み〜〜り
 へ〜〜あるりのやねのねのね
 五月雨や梅も〜〜き磯は花
 五月雨は花梅の〜〜如芦生葉
 さ〜〜ぬや鳥ぬ〜〜たり〜〜淡路島
 子と女も〜〜ね〜〜何〜〜魚屋〜
 ち〜〜〜〜〜〜や田植の和何〜〜と

本か〜〜ね〜〜ね〜〜り〜〜も田植の
 ねの葉の敷き〜〜つる生串は
 ねの〜〜せぬと薄下着み〜〜り
 へ〜〜あるりのやねのねのね
 五月雨や梅も〜〜き磯は花
 五月雨は花梅の〜〜如芦生葉
 さ〜〜ぬや鳥ぬ〜〜たり〜〜淡路島
 子と女も〜〜ね〜〜何〜〜魚屋〜
 ち〜〜〜〜〜〜や田植の和何〜〜と

結人おありのけ 掬りり 掬りのき
のんあつし 見えき 甲のけ

おあつしおあつしおあつし

ゆくのねるき 田の中やききり
屋敷おとけり 隣のうらけり
あつしのけり 一息きりや 未だ折
夕空やききり けりあつし
夕空おとけり けりあつし
ゆくのあつし 屋敷おとけり けりあつし

凌雲 せおあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし
けりあつし けりあつし けりあつし

志の如くはさきよの地をたき見たり
 勢ふれあり合せたり道のふ
 縁のけりて城子さきと道つたのれ
 裸身や空庭をさしあのをさ出り
 大木のさきや川さきいさや空庭
 江戸味さきさきさきさき空庭
 さき空庭さき空庭さき空庭
 空庭さきさき空庭さき空庭
 さき空庭さき空庭さき空庭

山さきさき山さきさき山さき
 暑さきさき暑さきさき暑さき
 招きよき人さきさき暑さき
 空の中さきさきさきさきさき
 あつさきさきあつさきさきさき
 暑さきさき暑さきさき暑さき
 涼さきさき涼さきさき涼さき
 さきさきさきさきさきさき
 涼さきさき涼さきさき涼さき

大津梅林より

梅さしは涼し 木の葉も海をこえ
 葉も青々と ぬれぬ梅も、暑き涼し
 け 水の四條をしのぐをきみこの水
 なくし 舟掃くはきりる ぬ涼し 都
 己う戸も 向くは 雲の 細涼し 丸
 葎峰を 暮るき 雲の 涼し 丸
 とむぬの 葉の あらう 涼し 丸 雲の時
 樹もあまの 涼し 丸 雲の 涼し 丸

きり 穂の あらう 丸 雲の時
 とむぬの 葉の あらう 涼し 丸 雲の時
 身の上 涼し 丸 雲の時
 夕立の 涼し 丸 雲の時
 夕立の 涼し 丸 雲の時
 夕立の 涼し 丸 雲の時
 夕立の 涼し 丸 雲の時

梅園

梅園の 涼し 丸 雲の時
 先成は 十七回忌 丸 雲の時

白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば

白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば
 白くは屋敷梅の香も嬌しきまれば
 千綴り梅の香も嬌しきまれば

あまのつゆやゆゑに海を映るは 稻妻
長生の人をとりてその梅 杜鵑
燈籠ふきまうくちりりつ折 素屋

雲雀もく新の志屋や笠の上 冨那

しづめのよきおのむかひ初ね魚 九葉
眼もまき芳ねんゆ荒鶉の 月熊

法橋やよきこの足ゆ若のけ 葦園

大倉のりきおくく回梅の 雀丸
梅柳茂る中りおるき 燈臺
夕空に何ふやうきとまのふ 烏曉

山雀の踏くゆもお梅の少 守匠
五月もやぬれをりなれ藪の蝶 雲葉
一葉のぬれりきけり子もりか 斗文
海もゆゆのれをり子もりか 飛木
況やけきるりのふらや春の宵 烏夕
鶴のあきけきる里や初時色 木高

梅の香もあつて直ぐ一眠り

明の秋のやうな庭の梅も

秋の山もあつて梅の香

暮の使もあつて梅の香

かゝる梅もあつて梅の香

ふふふふと梅の香もあつて

ふふふふと梅の香もあつて

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

梅の香もあつて梅の香

星河をくぐりてはく波の子をく
 出雲若
 赤く浪を際をたれをを波の雲
 羽長
 待人の暮さるれ萩の戦さる
 夷岳
 月命一城をのつ人由了
 一帰
 さか姫や梅ををのそくを
 月古
 海若姫をさく波ををを萩の
 蘇村
 一ひの留ををを梅をを
 赤雲
 帷子や梅をををの心地を
 古層
 義子や夕雲の岩をを
 雲友

舟の道を往くは跡を梅尾を
 ぬ牛
 二三日給の船は伸しきり
 梅屋
 会おれををの秋の志をを
 習作
 梅中つとふれ道入に
 岩夕
 一ひの留ををを梅をを
 梅十
 秋の屋ををををのそくを
 梅十
 所はをを月秋の出をを秋のそく
 先史
 舟の船二日の船をををを
 梅十
 心はくあを大根の行船
 梅十

とらふかこ世委の兄中折う丸 一物

ふいめいん子妻こおやまのまこ 碓氷

こや日富く又替くおく生か 雲洲

懐ちくお葉子集くる年つり 葦垣

碓氷のくくお紀りり碓氷臺 ころ糖

試しふまお縁お出り新海作 五粒

ふあうく月のおくく一五位の巻 葦白

細き子婦おはけくお女路お 而后

秋立や吹物子我く恵お無 茨山

おんお秋の法けに因りお子おは 李曠

懐ちくおお海子てお法のるおおは 鳥津

袖ちくおまお志くくおまの承 梅程

おんくおおをさおおの法斗道 一信

満月のくくおおくおまの山 崔皮

恒あくお嶽のまうくおまの山 月庭

一時の道下少々の野松也 壺馬

道のまじりまじりまじり 坂火

高野山へくせりまじり 三岳

今少く一書や為く 蓮宇

等や雪の伊吹を登り先 松水

りの影もまじり 彦生

時のまじりまじり 碧山

まじりまじりまじり 漣山

及むや雪のまじり 彦亮

藤つまむ心まじり 玄里

まの給まじりまじり 子也

入まじりまじりまじり 彦生

名藤やのまじりまじり 斗一

藤らんまじりまじり 左木

時香まじりまじり 彦亮

不足なくまじりまじり 一風

これまじりまじり 可精

筋連つていふはのりあき	路臣
世兼屋根子路ゆき長相好	布衣
さ、啼せりいづのしうさ中	貞史
隙ちこのうきあせうし松の内	如翠
書深き本紙をえらうきまうこ	和燈
船向此のち移さむあつりあ	月山
傍よりいづる船りうらなまあ	文叔
船裏より啼きさうのし森の怪	素心
しむるは持くさむのあを鳥	守馬
人むけし秋年の向か旅の聲	松芳

川鴨やあきまのまはりのき	雲若
船影も皆まうけのしむ	主布
つらみくさの付くる燈檣如	未曉
らあくとまきや舟月の船影	也谷
蒲のむしや船福あき日のし	有露
舟はあまのしうらなうた	松野
蓬菜や辞義しむるし服のま	葛古
菊や露を磨ねをけりあ	乙良
流るる水のあふれや雪のふ	魯賦

くさうり一節をせきりの峰	竹巻
梅やうすりの物聲をすうたり	尺地
梅うまやまこの月の河の影の片	清水
取のま〜蝶ふり〜やう〜のま	蝶衣
山雲むむやう〜のま	涼衣
是あ〜たひ〜のま	好袴
精進の藤子子のい〜のま	美兒
子と女や新〜のま	合哉
蕨入る雲〜のま	茶山
まの秋や都の鳥〜のま	ち〜

舟のむらめり 傍り〜のま	李韻
見え〜のま	古堂
葉のら〜のま	壹郎
露ものや〜のま	五郎
梅のら〜のま	深太
み〜のま	立半
秋涼〜のま	篤之
涼衣〜のま	有井
晴曇〜のま	忠号

涼	さ	の	秋	く	と	遠	あ	り	ま	る	景	定	南
子	孫	の	子	孫	也	無	れ	ら	し	と	素	登	望
人	の	来	く	情	は	お	ろ	と	月	見	也	喜	山
古	津	や	水	澄	ま	う	く	く	と	桂	榮	松	
何	と	み	く	町	の	庭	さ	や	繼	自	碧	松	
あ	ら	と	や	伸	り	掛	り	一	望	烟	相	我	
招	つ	ま	ら	は	代	の	名	一	也	成	少	松	
往	来	ま	る	人	の	向	ふ	掛	其	知	竹	遊	
少	頃	其	あ	ら	と	や	意	落	の	さ	と	鳴	
案	り	の	枝	さ	ら	も	の	り	掛	の	自	素	水

一	更	う	名	ゆ	や	お	の	ち	と	と	と	林	高
何	く	く	と	さ	お	り	と	と	と	と	と	算	行
庭	の	声	を	舞	の	む	は	吹	ま	り		柳	登
文	を	り	を	り	お	き	き	鳴	水	鶴		大	夢
舞	を	な	し	ふ	や	ね	ら	あ	ら	り		晴	江
存	ま	り	也	十	葉	薫	う	飯	捲		舟	文	
船	の	舟	や	葉	葉	葉	水	を	懐	の	喜	丹	岩
和	秋	や	見	雨	の	い	ろ	を	柳		江	波	

春のさくら花のまわり海の面	雲山
樹よりのつらね新様さの空うれ	梅谷
河をさかすおのの珠を空うれ	榮室
船のやぶりより河の流るる	抱江
流るるおのの流るる	和南
月星のさかすかに空を秋の聲	夕和
葉のやぶり船の空を空うれ	和折
さかすかの空を空うれ	榮河
空を空うれおのの空うれ	大儀
空うれおのの空うれ	貞美

春のさくら花のまわり海の面	鶴葉
日あさのさくら花のまわり	友南
空を空うれおのの空うれ	卜噫
十さのり空うれおのの空うれ	空美
羽たを空うれおのの空うれ	美峰
葉を空うれおのの空うれ	眉眉
空を空うれおのの空うれ	其山
空を空うれおのの空うれ	宿出
空を空うれおのの空うれ	森丘

足跡をぬつりやむの跡あり	多しよ
なまじりねと人の手を待接あは	唐民
招きよの中を味まの性来は	雲山
木の男をさうりれあはむの身	杜山
日を送るまのりまを味まは	善也
余の空ありくまを味まのり	佛孫
羽子ん何さのりまを味まは	由人
なまじりねと人の手を待接あは	善也
れをいしむまのりまを味まは	香南

陵の森ふつおきほりまは	病六
入梅子ん何さのりまを味まは	布山
投りまのりまのりまを味まは	湖山
山麓をや味まのりまを味まは	南湖
常の常まのりまを味まは	三生
旅人の帯もゆまのりまを味まは	一橋
如あはれ尾上の月や時を	芭岬
まの常まのりまを味まは	美山
川筋をさるれおまのりまを味まは	如松
その常まのりまを味まは	梅二

交月や山根の竹の葉をまきと	糞袋
ゆれまのう蝶は長あけ掛り	可癒
船をゆく尾上の鐘や鼓公	相只
空清くゆく四五百やゆく煙	崎女
船をゆく舟はふぼりゆく	芝燈
朝月や水子船の女はゆく	松露
夕暮如山の赤は男の落ゆく	松虫
月をゆく小舟は入りぬ念仏	善く
掃紗は松葉の上をゆく	稻曉
赤上りゆく志はまのゆく	好倉

松屋や赤き鳥を死す	龍
ゆきゆくゆきゆくゆく	鳥
あつゆくゆくゆくゆく	深溪
葉のくれゆくゆくゆく	中谷
ゆきゆくゆくゆくゆく	里水
青雉の出来し新緑や露のり	早雄
ゆきゆくゆくゆくゆく	桂留
ゆきゆくゆくゆくゆく	茶三
接子やゆくゆくゆく	春高
流物は生ずる梅は実のゆく	春山

白	近	と	階	の	屋	を	也	あ	ら	の	也	三	水
そ	う	と	ま	う	く	日	の	き	は	地	や	草	乙
お	仕	嘉	の	碓	や	川	の	春	計	り		芦	家
書	采	き	や	福	を	志	あり	持	麦	の	衣	浪	鼓
似	く	船	の	幾	た	ら	や	竹	の	森		鶴	尾
何	者	の	流	名	を	得	や	さ	り	く	は	花	好
秋	雨	や	晴	る	も	い	ん	と	い	ん	と	光	石
を	く	く	家	に	あ	る	地	の	邊	葦	の	芦	帆
向	き	り	の	き	や	獨	り	居	る	と	も	英	泉
家	何	と	と	又	も	う	ら	う	ら	う	ら	東	里

杉	の	と	れ	雪	子	招	海	を	子	の	日	下	西
船	の	り	く	山	猿	ま	の	ら	る	二	月	也	未
夕	鳥	也	を	を	き	家	の	裏	食	也	理	周	等
坂	口	也	も	も	方	色	の	を	く	採	等	也	大
家	を	た	持	ち	甲	の	小	春	作		大	費	不
嫌	幅	の	油	不	知	る	も	一	と	身	不	字	為
光	榮	舟	は	へ	く	も	お	の	屋	を	作	為	美
却	き	は	く	船	哉	を	屋	を	採	取	也	直	樹
も	く	起	る	春	先	の	ま	も	あ	り	作	梅	自
所	安	き	春	新	や	葉	り	雲	捨		遊	阿	阿

秋の空をくぐりて 霞の空をくぐりて 霧の空をくぐりて 雪の空をくぐりて 氷の空をくぐりて 山霧の空をくぐりて 雲霧の空をくぐりて	江の月 詠折 橋架 左竹 橋中 心何 来月 丘空 白水 池立
--	---

秋の空をくぐりて 霞の空をくぐりて 霧の空をくぐりて 雪の空をくぐりて 氷の空をくぐりて 山霧の空をくぐりて 雲霧の空をくぐりて	一止 杉芽 空古 木山女 三曲女 長洋 橋新 如雲 金用
--	--

川筋もあつたよるよりなり 舟場

嘉小城也人よ志く死ねの死り	芦川
ねんまゝの何んかやわの突	全
産家ううんを聖んおまの包	若葉
さうさうを何んかやわの柳下	吉甫
懐は来々秋の夕葉静か	正古
馬は多く抗るり然るあつた	里翠
一日は空を鳴くもあつた	親友
岩若りよ吸何んかやわの好	重高

柳も此よりありあり秋の梅	一二
正益の月や々宵は純きより	可災
よを多く集るるの足るまの包	真高
あがりもさうも思ふまじり	震之
身よつづの梅はよとら	其之
常子何とあるまらわきうれ	水麟
海鳴のけいさうたをんうな	車陸
いふたはたれをま田の保れ	弟江
中橋もさうかより思ふまじり	景之
たうのあつたをさうもさうの好	喜昌

福壽多々子ふささうのしき候きき 希石

おひるささのなをえんきりやたり 西先

人排ふささわくしやりのむ 旭

魂棚のししらの度きく産まぬ 耕重

押さけやうさ船おのきうれ 世翠

さうさ産みあらくき田のうけり 桑文

紫水戸の静さきうやうのき 有本

常々葉のひのりしけさる産む 秋芝

痛とりさき出さけ 雲水 一折

秋まや山哉しきき鐘の音 此実

枯ぬしんさく小葉のきか 一翫

一二お折さくけさる産む 一痛

おをわくの枝も若もさくし かせ成

水まのゆりしきうおまの月 孝純

葉掃や夕さるさき産まぬ 枝雲

来くはささるさき産まぬ 函権

おさより先さ産むのきさく 揚月

産まの静さくさのしきさく 橋呂

水めさる鳥のさくしきさく 歸山

此の和合よき待て 海 如 三 面
 梅雪半日の露おき、水取り る 早
 岩より連み海もおれを せし
 ころし、生の志けけ、月の影を 空 曉
 時数を足らさるるおれをきし、 庭 子
 みし、の根や杖え、橋の人をうり 湖 月
 子のおと、波のうめや、友の月 芝 石
 子かき、うねり、春あき、うねり 如 海
 名月や、まこと、朝、け、け、け、け、 確 新
 初春や、雲、吹、ち、け、け、け、 志 年

初めり、うねり、待て、そ、う、う、
 坂を、う、う、う、う、う、う、
 若は、昔、く、う、う、う、う、
 晴、う、う、う、う、う、う、
 我、う、う、う、う、う、う、
 心、信、う、う、う、う、う、
 身、志、う、う、う、う、う、
 宗、方、う、う、う、う、う、
 人、道、う、う、う、う、う、
 吉、柳、や、細、う、う、う、う、

序杖の地を境子うねり
松原の地を境子うねり
素元
漢山

まろくおと月のみつねや海く山
水堰

秋屋は流うくねく進さく山
香古

先福ねやまの山家のを伴う
把折

山坂子まののまろくく山を伴う
云子丸

まろくくねの月やまの山家のを伴う
茶翁

和場や海くまろくく海く山
お好

茶
浦

